

# 『中国の人間革命』に見る池田大作の平和理念と実践

大連工業大学 劉愛君

## 要旨：

池田大作は中日国交正常化の提唱者、中日民間外交の功労者であり、中日関係と友好交流を促進するために大きく貢献した人物である。1974年から1997年にかけて、池田大作は10回も中国を訪問した。帰国後、日本国内のさまざまなメディアの要請に応じて、訪中の見聞や感想を執筆し、全国の各種新聞や雑誌に寄稿した。その中、初訪中の所感を一冊にまとめて出版したのが『中国の人間革命』である。本論文は、この『中国の人間革命』を研究の対象として、文中に記載された初訪中の背景や目的、主な活動、見聞、感想などを中心に、池田大作の歴史観、中国観、平和観及び日本社会への影響について考察する。

池田大作の第一次訪中は2週間にわたるスケジュールで、北京、西安、鄭州、上海、杭州、広州などを訪問し、政府関係者、中日友好協会、中国仏教協会などと会談したほか、工場、人民公社、北京大学、小中学校、幼稚園、少年宮、各地の文化名所、記念館などを見学した。1974年当時は、世界的にも中国が孤立化している状況で、池田大作の目で見た中国の実像は日本の社会では大きな反響を呼んだ。

著書『中国の人間革命』は「私の見た中国」、「中国の素顔」、「友好と平和の旅を終えて」、「中国への道」の4章に分けて、政治、文化、教育、青年交流そして中国で出会った各分野の人々との対話、また帰国後の取材や対談などを幅広く記述している。池田大作の平和理念と実践はもちろん、当時の国際情勢、社会世論、外交関係なども窺える。

日中の平和友好は「政治、経済次元における交流を越えて、より永久的次元につながる幅広い民間レベルの対話と交流に広げる必要がある」と、池田大作は強調している。日本最大の民間団体指導者として、その言論は社会世論を導く上で大きな役割を果たしている。池田大作は終始一貫平和主義、人間主義の旗を高く掲げ、教育交流、文化交流を核心として民間友好の推進に努めた。その思想と行動は社会各界から大いに評価され、中日関係の発展に対して正しい方向と方法を示したと思われる。

今年2024年は池田大作の初訪中から50周年という記念すべき年である。池田大作著『中国の人間革命』をめぐって、氏の平和理念と実践について考察することは、中日両国の相互理解と国民感情の改善、また今後の友好交流関係の構築にとって重要な意義を持つと思う。

## 作者プロフィール：

劉愛君：女、1968年7月生まれ、東北師範大学卒業、文学博士、教授。

大連工業大学外国語学院学院長、池田大作思想研究所所長、大連池田大作思想研究連合会理事長。

連絡先：116034 遼寧省大連市甘井子区輕工苑1号大連工業大学外国語学院216室。

メールアドレス：liuaijun\_dl@126.com

携帯：13889520436。

# 『中国の人間革命』に見る池田大作の平和理念と実践

大連工業大学 劉愛君

## はじめに

池田大作は中日国交正常化の提唱者、中日民間外交の功労者であり、中日民間交流と友好関係を促進するために大きく貢献した人物である。1974年から1997年にかけて、池田大作は10回も中国を訪問した。帰国後、日本の各種新聞や雑誌の要請に応じて、訪中の見聞や感想について原稿を執筆して寄稿した。その中、初訪中の所感を一冊にまとめて発刊したのは『中国の人間革命』である。1974年当時は、世界的にも中国が孤立化している状況で、池田大作の目で見た中国の実像は日本の社会では大きな反響を呼んだ。日本最大の民間団体の指導者として、池田大作の中国に対する印象、中国文化に対する理解、両国関係に対する歴史的認識などは、日本民衆を導く上で大きな役割を果たした。

今年2024年は池田大作の初訪中50周年、『中国の人間革命』の出版から50年の節目にもあたる。著作に記載された池田大作の初訪中の背景や目的、主な活動や見聞、感想などを中心に、氏の歴史観、中国観、平和観及び日本社会への影響について考察することは、今日の中日両国の相互理解と国民感情の改善、各分野の友好交流関係の構築にとって深い現実的意義を持つであろう。また、戦後の中日関係及び両国の相互認識研究に対しても、一つの新たな視点を提供し、今後の国際関係、世界平和を考える上で参考になるものも多いと思われる。

## 1. 『中国の人間革命』の出版について

池田大作の初訪中は1974年5月30日から6月15日にかけて17日間にわたるスケジュールであった。北京、西安、鄭州、上海、杭州、広州などを訪問し、政府関係者、中日友好協会、中国仏教協会などと会談したほか、工場、人民公社、北京大学、小中学校、幼稚園、少年宮、各地の文化名所、記念館などを見学した。日本国内のさまざまなメディアの要請に応じて、池田大作は毎日過密スケジュールの中、時間を見つけては訪中の印象記を記録していた。帰国後、全国の各種新聞、雑誌が争って池田大作の訪中見聞を掲載し、日本社会で広く注目された。

1974年12月、各種メディアに掲載された池田の中国観察と感想は、日本の毎日新聞社から一冊にまとめられ、池田大作の第2回訪中直前に『中国の人間革命』と題して発刊された。そして、初版発行の日付を1974年12月5日にしたのである。奇しくも、1974年12月5日は、池田大作が第2次訪中の際、故周恩来総理との歴史的会見が行われた日でもある。

『中国の人間革命』はその後、1979年11月18日に聖教新聞社より文庫版（284ページ）を発行されたり、毎日新聞社により何回も印刷を重ねられたりした。著作は「私の見た中国」、「中国の素顔」、「友好と平和の旅を終えて」、「中国への道」の4章に分かれている。当時、隣国中国のことをあまりにも知らなかった日本では、池田大作の中国紀行と中国認識は、日本国民にもたらした影響が極めて大きいものであった。

## 2. 池田大作の初訪中の背景

1960年代から、周恩来総理は急速に拡大した庶民の団体、創価学会に強い関心を寄せ、学会のことを調べるように指示をした。LT 貿易駐日本事務所の中国代表の孫平化、光明日報社駐東京特派記者の劉徳有らは、周恩来総理の指示に従って、学会の青年幹部と積極的に接触し、学会に対する調査研究を進めた。

周知のとおり、1968年9月8日、池田大作は2万人近くの日本の青年学生の前で日中国交正常化提言（池田提言）を発表、「日本は中国の存在を正式に承認し、国交を正常化する。中国の国連での正当な地位を回復する。日本は中国と経済的・文化的な交流を推進する」<sup>①</sup>などの内容を主張した。当時は第二次世界大戦後の米ソ両国を中心とした資本主義陣営と共産主義陣営の対立という冷戦の時期でもあり、日本政府は中国に対して敵視政策を取っていたため、外務省高官は「池田提言」に対して強い不満の意を表明し、「創価学会池田会長の最近の演説は中国に対してひどく誤った期待を高めさせるもので、日本政府の外交の障害になる」<sup>②</sup>との見解を示した。また、多くの右翼が脅迫電話や街頭宣伝などで池田を非難したり攻撃したりした。しかし、池田大作は命がけの覚悟で一步も後退せず、同年の11月と12月、『中国』と『アジア』という学術月刊誌にも「中国問題と日本の使命」、「日中国交正常化提言」と題する論文を発表し、翌年には聖教新聞に連載中の小説『人間革命』第5巻において「日中平和友好条約の締結」まで訴えたのである。

池田大作の勇氣ある提言は、朝日、毎日、読売をはじめ新聞各紙に報道され、大きな反響を呼んだ。中日関係の改善を望む日本の有識者たちは大いに激励され、日本社会に漂う中日関係の悲観論に「一縷の光りを認めた」<sup>③</sup>、中日友好の推進に「百万の味方を得た」<sup>④</sup>と喜んだ。高碓達之助、松村謙三、有吉佐和子など中国との親交が深い友人からも盛んに池田大作の訪中を勧めた。周恩来総理をはじめ中国の首脳も池田提言を高く評価し、民衆を主体とする創価学会の役割に大きな期待を寄せ、池田会長の中国訪問を歓迎すると表明した。

池田大作は、国交正常化を有効に進めるのは、基本的には両国の政治家でなければならぬと考え、現時点では宗教者の自分ではなく、自分が創設した日本の公明党にその橋渡し役を担ってもらおう意向であった。1964年公明党が結党した際、池田は党の外交政策を作るにあたり「中国との国交回復に真剣に努めてもらいたい」<sup>⑤</sup>と、創立者の唯一の願いとして提案したのである。

1971年から1972年7月まで、日本の公明党代表団は3回も中国を訪問し、両国の関係改善と国交回復のために積極的に奔走した。1972年9月、田中角栄首相が訪中し、中日両国はついに国交正常化を実現し、両国関係史上の新たなページを開いた。

1974年5月29日、中日友好協会の要請に応じて池田大作は初の訪中に向けて出発した。

### 3. 初訪中の目的と主な活動

1974年5月30日から6月15日にかけて、池田大作を団長とする日本創価学会代表団は初めて中国を訪問した。

#### 3.1 初訪中の目的

5月29日、羽田の東京国際空港で、駐日中国大使館や新華社、日中文化交流協会、西園寺事務所、日本の新聞各社関係者など見送りの人々に向けて、池田大作は初訪中の目的を以下ように述べた。

① 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第10～11頁。

② 創価学会、『三代会長年譜』（上巻）、東京：聖教新聞社、2003年、第402頁。

③ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第12頁。

④ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第12頁。

⑤ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第10頁。

「政治・経済次元での交流は、ともすれば力の論理や利害が優先され、隙間風が生じてしまう場合があります。両国間の文化交流を第一義として、また民間次元で、人間と人間の真実の友好を促進し、永久的な、揺るぎない平和の基盤を築き上げていきたいと決意しております。特に、教育こそ新しい文化創造への一つの源泉であるとの認識に立って、新中国の教育の在り方を視察し、意見交換できれば嬉しいと思っております。

また、訪中団のメンバーの多くは青年です。したがって、新時代を担い立つ中国の青年や学生たちとの交流を、積極的に図っていききたいと念願しております。その交流を通して、両国青年の相互理解を一段と深め、信頼と友情の絆を確たるものにしていければと思います」<sup>⑥</sup>

上記のあいさつにおいて池田会長は、訪中の目的を文化交流、教育交流と青年交流の三つにまとめた。訪問期間中、さまざまな場面で繰り返して強調されたこの3点は、池田大作の民間外交の理念と実践の基本だと言える。すなわち国家間の交流は結局人と人との交流であり、民間レベルでの文化交流、教育交流、青年交流を強化することによって、心と心の絆を結び、相互理解と信頼を深めることができると、池田大作は確信しているのである。

### 3.2 初訪中の主な活動

当時、東京と北京間の直行便はまだ開通していなかった。5月30日、池田大作一行11人は香港を経由し、歩いて羅湖橋を渡り、深センに入り、広州から北京に到着した。2週間にわたる旅で、池田大作一行は北京、西安、鄭州、上海、杭州、広州などを訪問し、政府部門、中日友好協会、中国仏教協会などと会談したほか、工場、人民公社、北京大学、小中学校、幼稚園、少年宮殿、各地の文化名所、記念館などを見学した。李先念副総理、中日友好協会廖承志会長らと長時間、深い談話を行っただけでなく、中日平和友好条約締結、中国の核兵器問題、資源問題、組織と官僚主義、平和五原則などの問題について率直に意見交換し、中国の教師、学生、公社青年と座談会を開き、農民家庭に入り、少年児童の交歓活動にも参加した。いつも陰の存在を大切にすることから、池田大作は感謝レセプションまで開き、訪問中の中国人関係者、運転手やホテル従業員たちなどを招待した。二週間の日程は以下の通りである。

表 1: 1974 年池田大作初訪中日程表

日付	都市	訪問先
5.31—6.6	北京	故宮、北京市西城区新華小学校、中日友好協会、北京市少年宮、北京市西城区半導体設備第一工場、北京市郊外紅星中朝友好人民公社、北京市第三十五中学校、中国仏教協会、北京大学、長城、定陵博物館、十三陵ダム、人民大会堂
6.7—6.9	西安	西北第四綿紡績工場、八路軍西安事務所記念館、陝西省革命委員会、陝西省博物館、大慈恩寺、始皇帝陵、半坡博物館
6.9—6.10	鄭州	中国人民对外友好協会河南省分会
6.10—6.14	上海	上海市革命委員会、光明電気めっき工場、魯迅旧居、上海展覽館、盧湾区少年宮、曹楊新村、託児所、幼稚園、工場、虹橋人民公社
6.12	杭州	杭州綿紡績工場、杭州市革命委員会
6.14—6.15	広州	中国人民对外友好協会広東省分会、農民運動講習所旧居、広州市革命委員会

⑥ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第21頁。

#### 4. 『中国の人間革命』 への一考察

##### 4.1 訪中後の寄稿と出版

池田大作の初訪中に関する記事は当時、創価学会の機関紙『聖教新聞』に連日掲載されていた。そのほか、日本の各種新聞や雑誌からも原稿の執筆を依頼された。池田大作は少しでも多くの人に真実の中国を知ってもらい、理解を深めてほしいとの思いで寄稿した文章は以下の通りである。

表 2: 各種新聞・雑誌に掲載された池田大作の寄稿

タイトル	新聞・雑誌名	掲載時間
大河の流れ・中国革命	『朝日新聞』	1974.6.18
北京大学に想う	夕刊『読売新聞』	1974.6.28
精神の扉を開く	『日中文化交流』、日中文化交流協会	1974.6
中国の青年における人間革命	『週刊朝日』、朝日新聞社	1974.7
大河のごとく悠々と流れる中国革命の歩み	『サンデー毎日』、毎日新聞社	1974.7
独占インタビュー：創価学会から見た新しい中国	『週刊現代』、講談社	1974.7
中天を指す若木のように	『アサヒグラフ』、朝日新聞社	1974.7
この目で見た中国の三つの家庭と生活	『主婦の友』、主婦の友社	1974.8
未来を見つめる美しい生き方	『主婦と生活』、婦と生活社	1974.8
初めて見た中国	『婦人倶楽部』、講談社	1974.8
私の中国紀行	『現代』、講談社	1974.8
私の見た中国	『文芸春秋』、文芸春秋社	1974.8
対談：日中にかける金の橋	『潮』、潮出版社	1974.8
私が見てきた中国の子供たち	『ウーマン』、講談社	1974.9
日本人のパスポート	『壮快』、アイヘルス社	1974.10

1974 年 12 月、上記の池田大作の中国見聞は、毎日新聞社により『中国の人間革命』という一冊にまとめて発刊された。それは池田が初訪中を終えてわずか一週間ぐらいの間にかき綴った所感であるが、「その後の日中友好実践の基礎を形成したと言っても過言ではない」<sup>⑦</sup>と思われる。

##### 4.2 正しい歴史認識こそ平和友好の基盤

北京に到着した翌日の 5 月 31 日、池田大作は中日友好協会が開催した歓迎宴で挨拶し、創価学会の反戦の歴史を紹介し、自身の中国観と歴史観をはっきり表明した。

「日本の軍国主義がアジア諸国を蹂躪し、中国でも多くの民衆に大きな犠牲をもたらしたとき、創価学会の初代会長である牧口先生も、横暴な権力者によって刑務所に投獄

<sup>⑦</sup>高橋強、創作者池田大作先生の日中友好実践と「4つの主義」、『創価教育』第 13 号、創価大学、2020 年、135 頁。

された。獄中で自分の一生を終えた……創価学会は侵略主義、ファシズムと断固として闘う反戦の平和勢力として、民衆の中で戦い、成長した。われわれの目的は、地球上から『悲惨』の二字を消し、人類が存分に享受できる永続的平和の世界を築くことだ」<sup>⑧</sup>と述べた。

中国訪問を終えて、池田大作は『週刊現代』、『潮』出版社から取材を受け「友好と平和の旅を終えて」と題する対談が行われた。

まず、従来の中日関係について、池田大作は「中国と日本は歴史的に密接不可分な関係にあり、中国はいわば日本の“文化の泉”でもあった。地理的には言うまでもなく隣国です。単刀直入な言い方になるが、人間関係で考えてみれば理解しやすいでしょう。つまり、文化的恩恵を限りなく享受させてもらった隣人と友好を保ちえないならば、それは全く保ちえないほうの責任なのです」<sup>⑨</sup>と述べている。

また、歴史認識について、池田大作は「日中にかける金の橋——対談」において、中日戦争に係る歴史認識の問題をめぐって、自分の観点を明確に出している。池田は、歴史認識こそ中日友好交流の最も重要な基礎であると考え、戦後生まれた日本の若い人々には、戦争責任はないが、過去の日本の侵略戦争という事実を正しく認識しておく必要があると主張している。「その認識に基づいた相互理解、相互信頼、相互学習の幅広い民間次元での人間交流——このことが友好の一番大切な基盤だ」<sup>⑩</sup>と強調した。

池田大作は対談において、過去の戦争に対する中国の考え方も日本の民衆に伝えている。「中国の人たちは過去の日本の侵略戦争についてこう言います。あれは一握りの軍国主義者のやったことで、広範な日本人民も被害者です。過去日中間には不幸な一時期があったが、二千年の中日友好の悠久の歴史から見れば、その悲しい期間はほんの短い間です。こうした寛大な言葉を、私は心から感謝したいと思います。」<sup>⑪</sup>

このような中国の認識に対して、日本の取るべき態度について、池田大作は説明を加えている。「戦争の爪跡は、消え去るものではありません。肉親や知人、友人をむごたらしく殺された体験者にとっては、その痛ましい傷跡は、生涯、体のなかに刻みつけられ、残っているはずです。戦争による建物の破壊は、再び建築することによって、歳月の経過とともに忘れることは可能でしょう。しかし尊極な当体である人間の生命の破壊は、月日が重なるにつれていよいよその残虐性を鮮やかに浮かび上がらせていくものではないでしょうか。ですから、私たちは、中国の人々の寛大な言葉に甘えたり、いい気になってはならないと思います。」<sup>⑫</sup>

さらに、中日両国の友好関係の構築について、池田大作は交流の必要性だけでなく、相互交流の方法まで教えてくれた。「したがって大事なことは、人間と人間との深い触れ合いだと思います。両国の民衆と民衆が、静かに強く交流し、友情の砦を築き上げていくことが必要です。相互の立場を尊重し理解し合おうという謙虚な姿勢を貫いていくこと、また日中間のあの過去の侵略の歴史を忘れないで、中国の民衆に多大な犠牲と損害を与えた歴史を絶対に再び繰り返さない、という決意にたった友好関係を着実に築いていくことだと思います。」<sup>⑬</sup>

当時中国に対して日本の社会ではさまざまな偏見や誤解を抱えている。それに対し、池田大作は自身の目を見た真実の中国を日本の国民に伝えた。「中国には”前事不忘、後事之師”という言葉がありますが、過去を忘れての未来は無意味です。要は過去-現

⑧ 池田大作、『私の中国観』、成都：四川人民出版社、2009年、第21頁。

⑨ 池田大作、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第161-162頁。

⑩ 池田大作、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第178頁。

⑪ 池田大作、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第176頁。

⑫ 池田大作、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第177頁。

⑬ 池田大作、日中にかける金の橋—対談、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、178頁。

在-未来という流れの中で相互に理解しあうことでしょう。」<sup>⑭</sup>と、正しい歴史観を懸命に訴えていた。

#### 4.3 民間次元の交流が最重要な課題

池田大作が初めて訪中した1974年5月は、中日両国の間に国交回復に続いて『中日貿易協定』（1974年1月）と『中日航空協定』（同年4月）が調印された時期である。池田大作は「国交の眼目はただモノなどが行き交うことではなく、人間と人間の交流にこそある」<sup>⑮</sup>と考え、著書『中国の人間革命』の冒頭の文章——「精神の扉を開く」の中で、今後の交流の最重要な課題をずばりと指摘した。

「物理的に距離を短縮したことが、必ずしもそのまま精神的な距離を縮めることを意味しないからである。それは過去、両国が全くの隣同士でありながら、残念なことには精神的には極度に遠かった、異常な時代が続いてきたことから明らかである。大事なことは物理的扉のみならず精神的扉を開いていくことである。むしろ前者は後者の手段にすぎない。その精神の扉を開くためにこそ、民衆次元の交流が今後ますます重要になってくるのではなかろうか。」<sup>⑯</sup>

民間次元の交流として、池田大作が特に重要視しているのは、教育と文化の交流であり、若き世代の交流の道を開くことである。第一次訪中団のメンバーは、主に創価学会の青年幹部と学生代表から構成され、平均年齢はわずか35歳であった。訪問中、池田大作は北京大学をはじめ、小中学校を訪問したり児童節のイベントなどに参加したりして、「訪中の最大の眼目を教育交流においていた。」<sup>⑰</sup>そして、北京大学への5000冊の図書贈呈、中国の青年、学生の日本への招待も提案した。また滞在中、北京駐在の朝日新聞社のジャーナリストから「今、一番日中関係において重要なことは？」という質問を受けて、「日中友好を担う青年と青年の交流です」と池田大作は躊躇せずに答えた。教育、文化と青年交流を中心に民間次元の友好交流を推進する池田大作の理念と実践は、中日関係の発展のために正しい方向を示したと言えよう。

#### 4.4 異文化を平等に認め合う姿勢が国際感覚の第一歩

池田大作は、互いに友好を深めるには、「まず異なる文化（言語、生活慣習、風俗、歴史、伝統等）を平等に認め合うことから始めなければならない」<sup>⑱</sup>と主張している。そして、「日本人の悪い癖」を取り上げて、「外国に対する見方として、とかくある国は進んでいる、ある国は遅れている、という見方をしがちである。しかも、進んでいると思う国に対しては心酔し、遅れていると思う国に対しては蔑視の目を向けたがるのである」<sup>⑲</sup>と鋭く指摘したのである。

さらに、「この差別意識こそ、いまなお日本人が精神的鎖国状態にある証拠ではないかと考えている。異質な文化を平等に認めることが、まず国際感覚の第一歩というべきであろう」<sup>⑳</sup>と述べた。

池田大作が指摘したのは一部の日本人の問題であるが、国際交流の中で異なる国、異なる文化背景の人々との接しかたについて警鐘を鳴らしている。仏法思想家として、池田大作は「生命の尊厳」を提唱し、同じ人間に立脚する「世界民族主義」を主張してい

⑭ 池田大作、日中にかける金の橋一対談、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第162－163頁。

⑮ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第21頁。

⑯ 池田大作、精神の扉を開く、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第11頁。

⑰ 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第36頁。

⑱ 池田大作、精神の扉を開く、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第12頁。

⑲ 池田大作、精神の扉を開く、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第13頁。

⑳ 池田大作、精神の扉を開く、『中国の人間革命』、東京：毎日新聞社、1974年、第13頁。

る。これこそ池田大作の平和思想の根本であろう。すなわち、国際交流において、平等尊重の国際意識、国家、人種、宗教及び経済、文化、社会制度などの違いを超えて、相手の立場に立って物事を考えられる心の広さ、みな人間は平等であるという姿勢が何より問われているのである。

#### 4.5 一人一人との対話が民間外交の真髄

「国と国との友好といっても、民衆と民衆の心が結ばれなければ、結局は砂上の楼閣となってしまう」<sup>21</sup>とは池田大作の持論である。中国滞在中、わずかな時間も無駄にせず、池田大作は民衆との交流、目の前の一人一人との交流に最大のエネルギーを注いだのである。

池田の中国紀行では、若い通訳者、教師、大学生、労働者、知青、農民家庭、小学生など、一般庶民との交流場面がたくさん取り上げられている。相手の身分や地位にかかわらず、一人一人との出会いと誠実な対話を大切にする感動的な瞬間が多く描かれていた。杭州花港観魚公園の事例がその一つである。

当時、池田大作一行は公園で大雨に見舞われ、やむなく公園内で雨宿りになったが、そこには同じように雨宿りをしていた二十人ぐらいの人々がいた。池田大作は「日中友好を願って、日本の歌を皆さんにお聞かせしましょう」と提案し、一行は思い切り「桜花爛漫の歌」を合唱した。

「ふと見ると労働者と思われる年配の方がいる。私は肩に手をかけ、語りかけた。(略)山東省からやってきた鉱山労働者だという。固い握手を交わし、“尊い仕事をしてられます。どうか長生きしてください”と激励する。そばに11歳の男のお子さんがいた。“立派な人に成長し、日本に来てください”。私は子どもに一人の隣国の人間として語りかけた。子どもは微笑みながらきっぱりと答えた。“しっかり勉強していきます。日本の皆さんに学んでいきます”。見ると互いの服は、雨のため膚までしっとりと濡れていた。」

わずか2週間で6都市を訪問したハードなスケジュールの中で、このような美しい光景はたくさん残された。託児所や幼稚園を訪れた時にお礼のピアノを演奏したり、お世話になった人々を招いて答礼宴を開催したりして、いたるところで、接した眼前の一人と懸命に対話に努めて友好の絆を結びたい、という池田大作の理念と実践が窺われる。帰り際にも、池田大作は中日友好協会の関係者に、「晴れの日も 雨にも変わらぬ 友誼かな」「中日の 心と心の 金の橋」など真心の句を次々と贈った。

「一人一人との対話は、あまりにも小さなことのように思えるかもしれない。しかし、一滴の水が大河となるように、すべては一人から始まるのだ。一人から開けるのだ。ゆえに一人を大事にすることだ」<sup>22</sup>とは、池田大作の信念である。池田大作の初訪中の足跡を振り返ってみると、平等で誠実な信頼関係を構築し、未来に向けた友好交流の道を開拓するために、中国各分野の人々に触れ合い、一人ひとりとの対話を大切にしてきたのである。その理念と実践の中に、民間外交の真髄があると思われる。

以上のように、池田大作の初めての中国訪問は、「第一、繁栄する新中国の人民から学び、アジアの安定と世界平和の鍵である日中友好を実現するためにわずかな力を尽くす、第二、青年、学生間の信頼を深め、その交流の拡大に努める、第三、政治・経済の枠を超えて、恒久的な文化繁栄の道を切り開く」<sup>23</sup>という三つの目的を円満に達成された。

21 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第68頁。

22 池田大作、『新・人間革命』（第20巻）、東京：聖教新聞社、2009年、第135頁。

23 池田大作、『池田会長講演集』（第7巻）、東京：聖教新聞社、1977年、第268頁。



## 結びに

池田大作の初訪中、そして中国への共感と賞賛を記した印象記は、日本で大きな反響を呼んだ。日本経済協会顧問の岡崎嘉平太は池田大作の文章を「洞察が深い」、「現在の日本を、アジアを、そして世界の真の姿を確実に捉えている」、「日本政府と国民に深い示唆を与えるものである」<sup>24</sup>と称賛した。日中文化交流協会の事務局長、白土吾夫は池田大作の文筆活動について「その鋭さと、あふれるばかりの中国に対する深い友誼の念は、万人の共感を呼び起こすに違いない」<sup>25</sup>と評した。東京大学教授の寺沢一は、「中国を見る目は、教育、工場、青少年、農村、宗教、行楽地へと、実に隅々にまで及んでいる」「中国と中国民衆に対するほのぼのとした温かい愛情が吐露されている」「この中国紀行は、巻をおくことを忘れさせる秀逸の紀行である。こうした、著者の中国観に由来するものであろう」<sup>26</sup>と述べた。当時北京に滞在していた朝日新聞社平和問題調査室のジャーナリスト西園寺一晃も、池田大作の初訪中を「真剣な対話と友好の旅」<sup>27</sup>と評価した。

メディアは両国民衆の相互認識を形成する上で大きな影響力を持っている。特に有識者の言論が国際社会における役割は無視できないものである。『中国の人間革命』に記された池田大作の平和理念と実践は、日本の民衆に大きな影響を与えただけでなく、中日両国の友好交流に対しても指導的な理念と模範的なモデルや方法を示してくれたと思われる。現在、中日関係は民間交流の持続的な力が益々必要な時期であり、民間交流の建設的な役割を確実に発揮させるには、池田大作の思想と行動から大いに学ぶものがあると思う。

---

24 大原照久、『訪中三たび―池田会長とともに』、東京：第三文明社、1975年、第103頁。

25 大原照久、『訪中三たび―池田会長とともに』、東京：第三文明社、1975年、第103頁。

26 大原照久、『訪中三たび―池田会長とともに』、東京：第三文明社、1975年、第103頁～105頁。

27 大原照久、『訪中三たび―池田会長とともに』、東京：第三文明社、1975年、第102頁。